



次の達成へと

星陵祭の「アルジャーノンに花束は」は、35Rにとって最高の成果であった。パンフレットに「35Rは星陵大賞のためには演じません。あなたのために演じます」とあったがまさにその通り。そして、「あなた」のためだけでなく、「クラス」のためにも演じていたのではないかと今では思う。

*

確かに準備は大変だったが、昨年までの様子に比べると、全員がしっかりと劇を完成させようという意識を持って動いていたように思う。「●●ノ～！」とか、「●●ネン、これどうする？」とか、「●●はどこ？」など、それぞれの場面で中心となった責任者の諸君には大きな負担が掛かっていただろうし、それぞれ色々な思いはあるだろうが、何にせよ全員が一つの完成を目指して一体となっているなぁという印象を強く持った。大変だったパンフレット貼り付け・巻き上げ・箱詰め？作業も、手の空いている人がどんどん協力して開演までには何とか間に合わせていたし、途中で崩れてしまったにせよ、あれだけの内装をみんなで仕上げたり、光り輝く外装を仕上げたりと、やはり昨年までとは大違いであった。

もちろん、夏休み最後には試演ができるまでに仕上げた演技・ダンスパート、そして、そのバックを支えた音響・照明の努力が全ての基礎にあるだろう。8月末の段階であそこまで出来ていたからこそ、本番の演技で（泣き出す人がいたほど）観客を感動させることができたのだし、舞台装置や装飾のイメージが膨らんで、あれだけのセットを完成させることができたのである。

*

片付けの日に朝の再演を計画していることを最初に聞いた時は、片付けそのものも大変だし、チーフ会が計画的に後片付けを進めようとしている中で勝手に再演などしていたら、その計画の支障となってチーフ会ばかりでなく学校全体に迷惑をかけることになるのではないかと考えて、●●くんには禁止する旨伝えたが、よくよく話を聞いてみると、一般に公開するわけではなく、35Rのメンバーで、仕事やその他の関係で見られなかった人のために再演したいのだということであった。だから、作業が始まる8時20分には終わることを前提に、朝の最終公演を許可したのである。私は（せっかく●●くんが声を掛けてくれたが）何かあった時のためだと思ってご遠慮申し上げたが、最後の最後の舞台もきっと感動的だったに違いない。

ただ、私としては、2日目の最終公演の後、みんなの爽やかな泣き顔（…というのも変な表現だが…笑）を見て、納得したというか、やりきったのだなぁということをひしひしと感じたから、再演は見られなかったが、もう十分なのである。この思いをリアルに共有した君たちは、きっとこの感動を一生の宝物としてゆくに違いない。

*

真の感動は人が与えてくれるものではない。自ら関わり、自ら動くことの中でのみ得られるものなのである。その貴重な体験を、君たちは最高の友だちたちとともに分かち合うことができたのだ。その「達成」が、次の達成へと結びつくことを期待したい。